

而出或俛偏口中令噴出之、或所吸之烟入兩鼻孔不他洩之類、曲曲怪異千狀萬態、愈出愈奇、衆皆奇之、未知其所爲、彼又自謂恐諸客疑、余之縷烟中別有所設、乃請傍人之煙、一吸乍爲奇狀、如初、曲名數十難盡臆記、都下人每有饗宴、爭召助其興、云嗟此技固出於獨得、而入此妙境、何用心之至于此、可謂一奇技乎、夫煙草之盛于天下也、終至如此、可謂奇亦甚矣、實昇平之餘事也、

〔春波樓筆記〕余江漢曰、クタバコは天正の頃、異人持ち來る、長崎の櫻の馬場に之を種ゑ、遂に天下に流行す、此を今思ふに、長崎の者十人あれば、三四人之を吸ふ、京の者十人あれば、七八人之を吸ふ、江戸の者十人あれば、九人之を吸ふ、其吸ふ事甚夥し、東奥の人十人にして、十人吸はざる者なし、蝦夷國に至りては之を嚙む、

〔鶉衣 前篇拾遺〕煙草說

夜道の旅のねぶたきとて、腰に茶瓶も提られず、秋の寐覺の淋しきとて、棚の餅にも手のとゞかねば、只この煙草の友となるこそ、琴詩酒の三つにもまさるべけれ、埃のもえ杭をさがしたるは、宰予が晝寢の目ざましにて、行燈に首延したるは、小侍従が待宵ならむ、達摩は九年の壁にむかひて、炭團の重寶を悟り、西行は柳陰にまばし火打の光を樂む、されば出女の長きせるは、夕ぐれの柱にもたれて、口紅兀さじと吸たる、少は心づかひすらんを、船頭の短きせるは、舳さきに匍匐て、有明の月を詠ながら、大海へ吸がら投たるよ、いかに心のはれやかならむ、やごとなき座敷に、緞子張の煙草盆を、あまた數に引わたしたるより、路次の待合に、吸口包たるは、にくからぬ風流なれど、さすがに辭義合に、手間も取べし、只木がらしの松陰に、駕立て、繼きせる取まはせば、茶屋の唄のさし心得て、蛸がらに藁火もりてさし出したる、一瓠千金のたとへも、此時をいふにや、または雲雀なく、空のどかに、行先の渡場とひながら、畑打のきせるに、がん首さしあはせて、一ふく吸付たる心こそ、漂母が飯の情より、うれしさはまさらめ、そも煙草の徳も、むかしより人のかぞ